

児童心理

[Child Study] 子どもの心を育む教師と親のために

2015

5

No.1003

特集

子どもの「よさ」を見つける

●「よさ」に気づくと子どもは変わる ●子どもの「いいところ」が見えない教師 ●「気になる子」の「よさ」を見える化する ●こんな子の「よさ」をどう見つけるか ●ほめられて喜ばない子ども



連載

スマホ・ケータイ問題への対応

竹内和雄

学校外の子どもの今 <アートやおもちゃを仲間と楽しみ、育つ子どもたち>

多田千尋・津村一美・高橋亜希子・武田真理恵

児童心理

Child Study

〔特集〕

子どもの「よさ」を見つける

児童心理5月号

定価916円

本体848円

2015

5

金子書房

子どもの特性や持ち味を理解し、将来を見据えた支援につなぐ



A5判・184頁 本体1,800円+税



通常学級にいる発達障害のある子どもが、将来社会に出て困らないための理解や支援のあり方を紹介。学校のできる支援、就労準備支援、思春期・青年期に必要な支援などを、発達障害支援・特別支援教育の第一線で活躍する支援者・研究者・当事者たちが執筆。好評を得た「児童心理」2013年12月号臨時増刊の書籍化。

発達障害のある子の自立に向けた支援

——小・中学生の時期に、本当に必要な支援とは？

萩原 拓 編著
(北海道教育大学旭川校教授)



CONTENTS



第1章 総論・発達障害のある子の将来の自立を見据えた支援とは

「自分なりの自立」につながる支援のために

第2章 発達障害の基礎知識・最新情報

- ① 発達障害の診断基準——DSM-5を中心に
- ② 脳やからだの特性と発達障害
- ③ 知的機能と適応行動のアンバランス

第3章 支援のために知っておきたいこと——発達障害のある成人たちの現在

- ① 特別支援教育を受けていない世代の学齢期
- ② 就労におけるつまずきと支援の課題
- ③ 発達障害のある成人たちの生活の現状と課題
- ④ 〈当事者の声から〉1)「他者配慮型ASD者」という視点
- ⑤ 〈当事者の声から〉2) 他者とつながるために必要だったこと

第4章 自立に向けて学校のできる支援

- ① 子どもの将来を見据えた特別支援教育の取組
- ② 通常学級で特別支援を進めるために
- ③ 子どもたちの自立につながる個別支援計画とは
- ④ さまざまな体験を積ませるサポート

- ⑤ 本人の特性を尊重した学習環境づくり
- ⑥ 将来につながるソーシャルスキルトレーニング
- ⑦ 医療・福祉機関との連携
- ⑧ つまずき・二次障害を考える

第5章 思春期・青年期における支援の実践

- ① 思春期・青年期の発達障害の人たちへの医療支援
- ② 高校での特別支援教育と高等教育機関への進学
- ③ 余暇活動における支援
- ④ 思春期に大切な異性との人間関係の構築の支援

第6章 自立・就労に向けて

- ① 見落としやすい生活支援
- ② 中高生から始める就労準備支援
- ③ 雇用者と当事者をつなぐ

第7章 発達障害のある子の家族の理解と支援

- ① 教師が知っておきたい幼児期の療育・親支援
- ② 学齢期の子をもつ保護者・家庭の支援
- ③ 発達障害児のきょうだいへの支援



金子書房

TEL 03(3941)0111(代) FAX 03(3941)0163
URL http://www.kanekoshobo.co.jp

〒112-0012 東京都文京区大塚3-3-7



4910051430557

00848

雑誌 05143-5
Printed in Japan

子どもをやる気にさせる声かけとして承認の声かけがある。承認というのは、結果だけではなくその過程や成

「子どもをやる気にさせる承認の声かけ」

分はこうなりたい」「こんなことがしたい」などの明確な理由が存在すればやる気につながる。また、やりたい気持ち、やらなくてはいけない理由があっても、「やれそうであるという見通し」がもてなければ、やる気が生まれない。「自分でもできる」「これくらいならできる」というCANの要素が大切なのである。これらの三つの要素からやる気は生まれるが、長続きは難しいようである。そこで、もう一つの要素であるLIKEが必要になる。勉強が楽しくて楽しくて仕方ない場合は、やる気も持続する。勉強が最初から好きなことであれば問題は無いが、現実には稀なことが多い。そこで、とにかく一生懸命取り組み始めると、たいていの場合好きになるものである。だから、子どもをやる気にさせたり、声をかけたりする場合には、教師は今、どの領域に対してアプローチしているかを考えて臨むことが必要である。

子どもをやる気にさせる声かけとして承認の声かけがある。承認というのは、結果だけではなくその過程や成

「子どもをやる気にさせる承認の声かけ」

長度合いを含めてその子どもを認めることである。平たく言えば、「頑張っていることやよさを見つけ、ほめてあげる」ことである。そこで、苦手教科の「算数」を頑張っている子どもに、四つの視点で声をかけるとどうなるかをお話したい。

① MUSTの声かけ
 「最近頑張っているから、今日の宿題は絶対にやっつこないとダメだよ」
 勉強が軌道に乗るまでは、MUSTの要素も大切である。宿題などの提出物をきちんとやるように指示し、授業中の学習態度もきちんとさせる。もちろん、きちんと処理できたり努力の跡が見られたら、そのことも認めて、フィードバックすることは当然である。

② WANTの声かけ
 「勉強を頑張っているキミは、クラスの模範ですね」
 アメリカの心理学者、アブラハム・マズローの欲求五段階階説によると、人にはまず生理的欲求や身の安全を確保したいという低次の欲求がある。これが満たされて初めて、集団への帰属欲求が生まれ、それが満たされると、自分の存在や価値を認めて欲しいという承認の欲求

子どものよさを引き出す教師

苦手教科をがんばっている子に声をかける

やる気の原動力

教師であれば、誰でも子どもに意欲的になってほしいと考えている。そこでまず最初に、やる気の原動力についてお話ししよう。

やる気の原動力には四つの要素がある。一つ目はMUSTである。大人であつても期日ギリギリにならないとやる気が湧かないことはよくある。MUSTはとても大きな力を発揮する。しかし、問題もある。それは、やらなければならぬ理由が消滅したら、やる必要がなくなるからである。テストがあるから勉強するという理由の子は、テストが終われば遊んでいてもよいということになる。だから、次のWANTが大切になってくる。「自

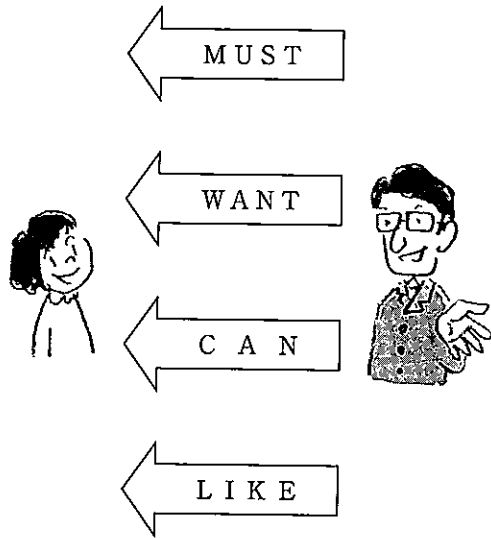


図1 やる気の4つの要素

愛知県刈谷市立朝日中学校教諭

神谷 和宏
かみや かずひろ

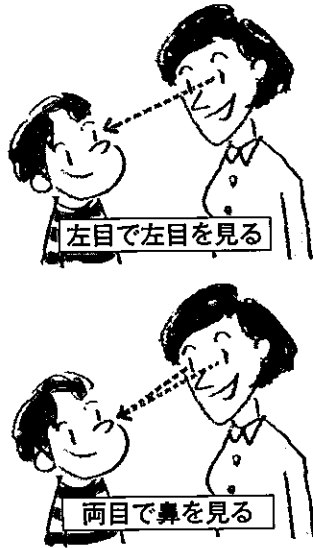


図2 気持ちを通わせるアイコンタクト

「目は口ほどに物を言う」ということわざがあるが、子どもに声をかけるときに、どこを見ているかは重要である。口では子どもを認めていても、視線が上の空では気持ちが伝わらない。そこでアイコンタクトが必要になる。まずは「語りかけるように、穏やかな眼差し」が必要である。子どもに安心感を与え、教師自身も話やすくする。

話すことが苦手な人の中には、視線を合わすと緊張し

四 目で話すアイコンタクト

「算数も社会と同じで、勉強してみると楽しいですね」「本来学ぶということ、知識を得ること」は楽しいことである。だから、苦手な教科でも楽しいと思わせてしまいうことが学習を継続させるために重要である。その結果、苦手教科はもはや苦手教科ではなくなる。教師も一緒に「どこが面白い」「何が興味深い」「どこが楽しい」など、楽しさが共有できるともっと素晴らしい承認になる。

④ LIKEの声かけ

「きつと、明日の計算のテストは満点が取れそうだね」できそうにないことには最初から意欲が湧いてこない。できると思わせることから始める。それには、いきなり大きな目標に取り組ませることよりも、目標をステップにして、できた・わかったという自信を積み重ねたいものである。すると、自ら大きな目標にもチャレンジする子どもに成長する。

③ CANの声かけ

が生まれるとされている。そして、その欲求が満たされると自己実現の欲求という最終ステージにたどりつく。だから、その子のなりたいたい姿、求めていることとつなげて声かけするのがいいだろう。

三 気持ちが伝わるIメッセージ

子どもはただ単に事実だけを伝えられてほめられることよりも、教師や周囲から大切にされている、仲間として認められているなど集団としての存在感を求めている。それには、教師のもっている気持ちや感情までも、うまく伝えることである。たとえば二つのほめ方を比べてみてほしい。

A…キミは頑張っています。

B…キミは頑張っているから、先生は嬉しいよ。

いかがだろうか？ 同じ事実を伝えているにもかかわらず感じ方が違わないだろうか。Aの伝え方はどうも冷たく感じる。このAの伝え方をYOUメッセージ（あなたを主語にした伝え方）、Bの伝え方をIメッセージ（私を主語にした伝え方）と言う。

子どもによつては、YOUメッセージはお世辞を言っていると感じたり、大切にしてもらえていないと感じたりする。それに比べて、Iメッセージは教師の思いや感情まで伝わりやすくなる。また、否定することができず、所属感や存在感を感じることができる。

てしまうという人も結構いる。しかし、子どもは「こっちを見てよ」と思っているだろう。視線を合わせないと「無視している」と捉えられがちである。そこで、上手なアイコンタクトを二つ紹介する。

一つ目は「左目で子どもの左目を見る」ということである。左目は右脳とつながっており、ほんのりとした感じや心地よさを与えられると言われているからである。また、片目だから、視線も外しやすい。もう一つは、「両目で鼻を見る」ということである。鼻は顔の中央に位置しているので「よく自分のことを見ていてくれる」という印象を与える。

五 ほめると叱るは四対一くらいが ちよつといい

次にほめると同じくらい大切な、「叱る」についてもお話しよう。最近教育界で話題になることの一つに「叱れない教師」の存在がある。

叱れない理由としては、自信がないとか、叱り方がわからないとか、中学生くらいになると叱るのが怖いというのもあるかもしれない。

ほめると叱るは、自動車でたとえるとアクセルとブレ

「キ」のようなものである。アクセルを踏まないと推進力が生まれずまったく進まない。しかし、アクセルばかりでは自動車は制御できない。どこかにぶつかってしまふ。きちんとブレーキをかける必要がある。また、多くの教師や専門家に、このことを尋ねたことがあるが、その割合は大方四対一くらいがちょうどよいようである。

六 叱り方は疑問形で

叱り方にもコツがある。たとえば、授業中に落書きをしていた子どもがいたとする。

「授業中に落書きをしているのはダメじゃないか」

「授業中に落書きしているなんて、いつものキミらしくないかな。」

と二つの叱り方がある。どちらが子どもの心に響くだろうか。前者のように厳しく叱られた方がよいという子どももいるが、大方は後者のように、疑問形で指摘された方が心に残る。前者は場合によっては、人間否定に捉えられたりしがちだが、後者は感情が伝わり、問題解決に注目することができる。

七 モチベーションアップフレーズ

最後に子どもの自尊感情を高め、意欲を喚起するための言葉を紹介する。それをモチベーションアップフレーズと言ふ。

・「さすがー」と自尊感情に働きかけ、その気にさせる
「やるなあ」「なるほどー すごい」「見方が違うよね」「先生も気がつかなかった」……

・「キミしかない」と思わせて、その気にさせる

「他の人ではダメだ」「他の先生が言ってたけど……」

「今までにキミのような子はいなかった」……

・「キミならできる」と励まし、その気にさせる

「前回もできたね」「大丈夫、やれる」「太鼓判を押すよ」……

教師は「子どもは大人の思い通りになる」と思っている面があるが、そのような接し方では行き詰まってしまふ。そこで、どのような視点で声かけをしたら「その気になつてもらえるか」を常に考えながら接したいものである。